

# マグダラのマリアの物語

2018/06/06 井田 泉

聖書の中には何人かのマリアが登場します。イエスの母マリア、ベタニアのマリアその他……。それと区別して、彼女の出身地をとって「マグダラのマリア」と呼ばれています。マグダラはガリラヤ湖西岸の町で、当時は土器製造、染色工業、魚の加工などが盛んでした。

「マリア」の名は、旧約聖書・出エジプト記に出てくるモーセの姉「ミリアム」に起源を持ちます。「ミリアム」とは「高い」、あるいは「切望された」という意味だと言われます。

詳しいことはわからないのですが、マグダラのマリアは、いつの頃からか重い病に苦しむようになりました。その苦しみは体よりもむしろ心のほうにありました。自分の中に自分ではどうすることもできない何かを取りついていて、それがいつも自分を抑えつけているような状態でした。それはもう



ガリラヤ湖西岸のマグダラ

「悪霊」としか言いようのないもので、しばしば勝手に自分の中で暴れ出し、手の付けられないような状態になるのです。内側では自分の魂は押しつぶされた状態になり、恐れ、憎しみ、怒り、絶望から、自分と人を傷つけるような言葉や行動が起こってきます。

たくさんの医者にもかかり、占いやまじないをする人たちの所にも連れて行かれましたが、少しもよくなりませんでした。自分で自分を傷つけて何度か死のうとしましたが、成功しませんでした。死んだらどんなに楽かと思いつつ、死ぬこともできず、自分を責め、自分を呪い、世界を憎みました。神に救いを切に求める自分があるかと思うと、自分を救うことのできない神さえ呪うこともありました。自分はすべての人から嫌われ、生きている意味はなく、神はこのような自分を罰し続けるに違いない、とっていました。

このような自分のことを「七つの悪霊に取り憑かれている」（ルカ 8:2、マルコ 16:9）と人々は言っていましたし、自分でもそう思っていました。

ところがある時、イエスという人と出会いました。イエスの話を聞いていると、これまで思ってきたような神とは違う、自分を肯定し受け入れてくれる確かな存在があるように感じました。もう他に自分が行くところはない。この人について行こうと決心しました。どうせ

だれからもどこからも必要とされていない自分なのだから、このイエスについて行って生きるなら生きる、死ぬなら死ぬと決めたのです。

イエスに従って旅する人の中には、男性も女性もいました。それぞれが悩みや苦しみを抱えた人たちでした。ただ共通するのは、イエスを信頼していることでした。イエスの言葉と声を聞くと、これまで経験したことのない喜びを感じ、一緒に祈るとき、それまで知らなかった平安を与えられました。

とはいえ、一度に自分が元気になったわけではありません。イエスの群れの中にも時折あの「悪霊」が自分を襲ってきて発作が起こり、自暴自棄になることがありました。そのようなとき、イエスはわたしの手を掴んで本気で祈り、時には激しく叱りつけました。そういうことを繰り返すうちに、ある頃から自分の中には「悪霊」とは反対のもの、「神の霊」と言ったらいいのでしょうか——不思議な何かが自分のうちに働くようになって、荒れ狂っていた自分は次第に過去のものとなり、平安と慰めと、生きる力が与えられるようになりました。イエスとの出会いとその言葉、祈りによって、自分は癒され、「七つの悪霊」は追放されたのです。

わたしは他の人と一緒に、イエスの一行のために祈り、働きました。自分は生きていてよい、自分もまた神と人の力となり喜びとなることが許されている、と感じることはこのうえない喜びでした。

はっきり言わなければならないのですが、わたしは初めはイエスさまのことを預言者（神の声を聞かせてくれる人）と思い、また偉大な教師だと思っていました。その存在と言葉には特別な権威と力と、それにだれにもない愛がありました。教師だとは言っても、いつも教師然とされているわけではなく、食卓を囲むときなど、親密な友人のような感じでした。

けれどもそれだけではない。この方は神から来られた方、わたし個人の救い主であるとともに世界の救い主であると信じるようになりました。イエスをとおしてわたしたちははっきり生きておられる神と出会っていたのです。それも審判の恐ろしい神ではなく、わたしたちを限りなく愛してくださる神と。

イエスに従って3年、春の過越祭を前にして、イエスに危険が迫っているのをわたしたちは感じていました。ある木曜日、夕食の前にイエスはわたしたちの足をひとりひとり洗ってくださいました。申し訳なくもったいないことでしたが、どれほどイエスがわたしたちを愛してくださるかが身にしみました。そしてそれが、イエスとともにした最後の食事となったのです。

その日の深夜、イエスさまは捕らえられて裁判にかけられ、死刑の判決を受けました。神殿冒瀆罪。また自分を神と等しい者とした、というのが罪状のようでした。わたしたちは心からイエスさまを慕っていましたが、それを快く思わない力を持った人たちの、心ない、ほんとうに心ない暴力でした。

金曜日の昼間、イエスはローマ総督の権限により、十字架にかけられました。わたしたちは十字架にかけられたイエスの姿をじっと見つめていました。自分の命の恩人である方がこのようなむごい扱いを受けて殺されていく。耐えがたいことでした。しかしわたしたちはた

とえ一緒に捕らえられて死ぬ目にあっても、その場を離れるつもりはありませんでした。明らかにこの方こそが正しいのであり、この方の命を奪うのは、かつてわたしに取りついていた「悪霊」の働きだと感じました。

夕方、わたしたちはイエスさまが十字架から降ろされるのを見守り、お体が墓に葬られるのを見つめていました。

日曜日の朝早く、香料を用意してわたしたちはイエスさまの墓に急ぎました。ところが、墓にはイエスさまのご遺体がなくなっているではありませんか！ 急いで仲間のペテロとヨハネに知らせに行きました。二人は墓に来て、困惑しながらやがて帰っていきました。

けれどもわたしはその場を立ち去ることはできませんでした。かけがえのないイエスさまを失って自分はどこに行くところがあるでしょうか。イエスが死なれたなら、わたしももう生きている意味がありません。

わたしはずっと墓の前に立ってひとり泣いていました。そして身をかがめて墓の中をのぞきました。すると白い衣を着た天使のような方が二人いて、「女の人、どうして泣いているのか」と言いました。わたしは言いました。

「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

こう言いながらふと後ろに人の気配を感じて振り向きました。人がそこに立っていてこう言いました。

「女の人、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」

わたしはその人は園丁だと思って言いました。

「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」

思わず口をついて出た言葉です。でもわたしは本気でした。たとえもう生きておられるイエスとは二度と会えなくても、イエスを愛していないような人にご遺体をまかせることなど考えられません。

そのとき「マリア！」という声が聞こえました。あのなつかしい声です。まさかと思って振り向いたそこに、イエスさまがほほえみつつ立っておられたのです。わたしは思わず「ラボニ」（先生）と言って、イエスさまにすがりつきました。

イエスは言われました。



ルーベンス「キリスト降下」

「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」(ヨハネ 20:17)

わたしはイエスさまが言われたとおりの言葉を、仲間の弟子たちに伝えました。そして何より何よりこう言ったのです。「わたしは主を見ました！」(ヨハネ 20:18)

このようにマグダラのマリアは、復活のイエスに最初に出会った人となり、また復活されたイエスを使徒たちに知らせる使徒、言わば「使徒たちへの使徒」Apostle to the Apostles となりました。

---

マグダラのマリアは深い苦しみを抱えた人でした。

彼女はイエスと出会って救われた人でした。

同時に、彼女はイエスと人々のために奉仕し、それを喜びとする積極的な人生を歩むようになりました。

イエスを救い主と確信した彼女は、イエスの十字架の刑のときもそこを去らず、悪の力に絶対に屈しない姿勢を示しました。

そして彼女はイエスの葬りに立ち会い、日曜日の朝、復活の主イエスと喜びの再会を果たし、それを他の弟子たちに伝える人となったのです。

マグダラの聖マリヤ日の祈り

7月22日

全能の神よ、み子はマグダラの聖マリヤの心と体の健康を回復され、さらに復活の証言者として召されました。どうかみ恵みによって、わたしたちを<sup>ゆる</sup>赦しまたいやし、み子の復活の命によってカづけ、主に仕えさせてください。父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられる主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン